「安寧あるまち」をつくるために必要なこと

藤井聡　京都大学大学院工学研究科 教授

「安寧あるまち」は、「まちづくり」があってはじめてつくられる。では、「安寧あるまち」をつくるまちづくりを進めるためには、一体なにが必要なのか。この問いに対する答えの一つは、「民俗学」にある。この点について、岐阜市文化産業交通センターでの中部EST創発セミナーにて講演（2012年1月18日）した内容の一部を、改めて編集しつつ、ここに掲載する。

「人間が大事」と「まちが大事」は同じこと

人間とまちというのは、これは不可分です。

人間があってまちがあって、まちがあって人間がある。

ある一つの社会みたいなものがあって、それを「ミクロに見たら人間」になりますし、「マクロに見たらまち」になるということなんです。

もっとマクロに見ると国になって、ミクロに見ると国民になる。国民と国というのは、いわば家とその家族のメンバーの関係と同じなんですね。

「家」と「家族」とは不可分です。

個人が集まって家があるんじゃなくて、家というものと家族のメンバーというのは――これは哲学的にいうと同時相即的というんですが、コインの表と裏のように、一緒に浮かび上がってくるものなんです。

コインの表だけを切り離したら、また裏ができます。結局、表ができるときには裏ができるということで、こういうのを同時相即的というんです。ようするに、家と家族のメンバーというのも、そんなふうにして「同時」にできるもので、一方が先にあって他方ができるってもんじゃないんですね。

だから、「人間が大事」というのと、「まちが大事」というのは、じつはこれは同じなんですよね。

まずここから、多くの論者は間違えています。

おもに経済学部系で、「経済学村」でずっと研究している人はどうも、「人間が集まってまちができている」と考える節があります。大間違いであります。

ふるさとがあって人間があるんです。

だから、ふるさとが津波によってつぶれるということは、それはもう人間が殺されているのと同じであります。

人間が生き残ってよかったな。それはよかったです。

なぜかというと、人間というものは、ふるさとのいちばん小さい単位ですから、人間のたたずまいが残っているだけで、まだふるさとが若干残っているということです。その小さな種に基づいて、またふるさとをつくっていくことができるということはいえるんです。

ところが、ヒューマニズム、人間の命があればそれでよいというくせに、ふるさとなんて、エコタウンにつくり替えりゃいいやないか——そういうのが今、まかり通っているわけです。

真面目に「まち」、「むら」に向き合った柳田國男

柳田國男という著名な方がおられます。

この柳田國男は、こういうことにごつついむかついて、英語ではフォークロアと言いますけれども、民俗学を始めた。

彼はもともと官僚であります。役人であります。役所の人間であります。みなさんのなかにも役所の方がおられると思いますけれども、柳田國男は、たんなる学者じゃなくて、役所の人間だったわけです。べつに学者をしようと思っているわけでもなんでもない、農林水産業の農政官僚です。農業の仕事を行政としてまじめにやるということは、農業を一所懸命にもり立てるということなんですけれども、究極的には農民を救うということが重要なんです。

今申し上げましたように、農民を救うということと、農村を救うということは、コインの表と裏とまったく同じことなわけです。

農村をつぶしてエコシティをつくったら、農民は死んじゃうんです。

特区をつくって、漁業で株式会社をつくろうということを言う方がおられますが、東北で、その人の言うようにやると、ふるさとが死んじゃうんです。

それはもう完全に間違いなんですが、柳田國男はそういう発想をまったくしていないんです。

あの人は徹底的に、人間の本質というものを心でわかっていたんです。頭じゃなくて魂でわかっていたんです。

なぜわかったか。それはまじめだったからです。

なぜ、某知事さんはそれがわからないか、不真面目だからです。真剣じゃないからです。自分の職業に対して真剣であれば、そこにいる人間のことを一所懸命、その人の立場になっていろいろ考えていると、その人とふるさとというものは不可分だということが見えてきます。

某知事さんが人間じゃないという可能性もあります。じつは、ロボットかなにかかもしれません。(笑)某塾(なにがし)というのは、ロボットかなにかをつくっているのかもしれませんね。たぶん人間だとすると、あとはもう考えられるのは、不真面目だからとしか言いようがないです。証拠に、自分の息子に関しては、絶対にものすごく一所懸命にすると思います。家のなにかを大事にしたり、自分の身の周りの風習、そういうのはものすごく守ろうとするに決まっています。

真面目って、真正面の真に、面と向かって目を見るということです。子供が目の前におるわけです。そうしたら、この子のことが大事だと思うわけであります。そうなると、その人間というものと、ふるさとや町、村というものとが不可分であるということがわかるんです。

さて、柳田國男は、そうやって農政官僚として、農政官僚の仕事に対して真面目に向き合います。それで、農民を助けたい、農村を助けたいと一所懸命に思うあまり、「こんな行政をやっていても、この人らを助けられへんわ」と思うんです。

当然ながら、行政が不要だと言っているんじゃないんです。

行政は絶対に必要なんだけれども、柳田國男が必要だと思うことをやっている人間がほかにいなかったのです。いたら、その人にやってもらったらいいと柳田國男は思っていたはずです。官僚の仕事は私じゃなくても誰かがやるやろと思った。でも、柳田國男が必要だと思う仕事は、誰もやっていない。だから、「え、わしがやらなあかんのか」ということになった。

その時に彼が、「面倒くさ」と思ったかどうかは知りませんけど、普通の人間だったら、面倒くさと思います。「ひやーっ、面倒くさ」と。(笑)

そこで、現地に入って、最近の社会学的にいうところのエスノグラフィーっていう手法ですが、おじいちゃんやおばあちゃんの話を聞いて、それを書き残していくんです。

彼はもともと、いわゆる職業的な「学者」じゃないですから、エスノグラフィー理論に基づいて、こうすればうまくいくだろうなんていう知識は、たぶんなかったと思います。

ところが、農政官僚として地元に入って、おじいちゃんやおばあちゃんの話をいろいろと聞いていると、話を聞いてあげるだけで、なぜかじいちゃんやばあちゃんがめっちゃ元気になっていくとか、あるいはそうやって聞いた話をちょっとまとめて読ませたら、若者がやたらと張り切り出すとか……。こういうことをやったほうが、農政官僚でやるよりもええんちゃうかと気付かはったんです。

なんで気付いたか。

真面目だったからです。

一所懸命にその農民のことを考えていたんです。

「まちづくり」の本質──そのまちの「マグマ」の噴火

なんで私、こんなことを知っているかというと、彼の直系の弟子とよく話をするからです。

直系の遺伝子が流れている人の話を聞くと、そういう話をバーッと、お酒を飲んでいても言ってくれるんです。あ、なるほどな、そういうことなんやと思って……。

さて、その柳田國男はとにかく、農民を助けたい、助けたいっていう、もうそればっかりなんです。その友人からいつも聞くのは、正確な美しい日本語は忘れましたけれど、柳田國男は、「農はなぜ貧なのか」というようなことを言うんやそうです。

「なんで農民はこんだけ貧乏なんや。これ、なんとかしてあげたい」と、そう思わはったわけです。それで、とにかく話を聞くと、そのおじいちゃんやおばあちゃんが話をしだす。みなさんもなにか、そういう経験あるんじゃないかと思います。昔話をしていると、だんだん思い出してくる。

柳田國男はめちゃめちゃしつこく、毎日聞きます。そうしたら、70歳ぐらいのおじいちゃんやおばあちゃんが、13や14歳くらいの若いころを思い出

してくるんです。「そういや、あそこは今こうなっているけど、昔はこうで、若いのが来て、こんなことやっとったな」。「そういや、あんときこんなことがあったな」と、ぶわーっと泉から水がわき出るように、うわーっと話が出てくるんです。

柳田國男はあまり科学者的なことを言わないですから、こういう言い方はされていないかもしれませんが、ふるさとや村には「命」の「炎」があるんです、「マグマ」みたいなものがあるんです。

ところが、世の中は世知辛いですから、東京的なるもの ──『東京物語』の東京的なるものです。年輩の方以外は知らんかもしれません。尾道にあった美しい風情と、東京にあるどうしようもない、くだらない風景があるんですけれども、その尾道的な、なんか命のある、なんていいますかエネルギーがあるんです、人間の魂、民族の魂みたいなエネルギーが……。

これはもうね、経済学理論では絶対に言えないんです、物理学では100%表現できないんですが、真面目に生きている人間であれば誰もがわかるエネルギーみたいなものが、その町や村にはあるんです。

ですが、そこに東京的なるものが来て、経済的なもの、新自由主義的なものが来て、TPP的なるものが来て、グローバル企業的なるものが来て、物理学的なるものが来て、なんかそういうニヒリズム的なものが来ると、だんだん、だんだんと命は──生きている限り無くなりはしないんですけれど、「隠ぺい」されていくんです。

こういうことを民俗学ではとりあつかうわけで、ここらへんが民俗学のすばらしいところです。彼らは学者として、こういう「表現形」をつくり出すんですね。

とにかく、なんか命みたいなものがあって、それになにか冷たいものが覆い被さってゆく。

世の中世知辛いですから、70年も生きていると、おじいちゃん、おばあちゃんは忘れるんです。どこかにくすぶり続けているものがあるんですけれど、「いや、もうしょうがない、しょうがない」といって、隠ぺいしていくんです。日本人はすぐに「しょうがない」って言います。それを民俗学者が、ああなのか、こうなのかと聞いていくと、もうマグマと同じです、地震の噴火と同じです、太い、太い、ニヒリズム的な、ニヒリスティックな地殻、もう冷め切った地殻を突き抜けて、マグマが「噴火」するんです。

そこからまちづくりが始まる。

これが民俗学的アプローチなんです。

知らなかったでしょう。じつは私も知らなかったんですよ、友人の民俗学者に聞くまで。(笑)

民俗学というのは、その土地に埋まっている命のマグマみたいなものを噴火させるアプローチなんです。柳田國男はそのことに、直観的に、本能的に気付いたんです、真面目だから。まあ、頭もよかったんでしょうけれど、「真面目だから」気付いたんですね。

*

「安寧あるまち」は、そのまちにある「マグマ」──それはそのまちの「生」とも換言可能であろう──を引き出すことができてはじめて、実現可能なものである。すべてのまちづくりアプローチは、この柳田國男の感覚を身にまとったものでなければ、成功しえないに違いない。